

主体的に音と向き合い 仲間と共につくる喜びを味わう
音楽づくりの授業実践研究

～2, 3, 4学年における音楽づくりを通して～

<目次>

1 研究の主旨

2 研究の内容

- 2. 1 2学年における授業実践
- 2. 2 2学年の授業で用いた教材と利用場面
- 2. 3 2学年の実証授業の考察
- 2. 4 3学年における授業実践
- 2. 5 3学年の授業で用いた教材と利用場面
- 2. 6 3学年の実証授業の考察
- 2. 7 4学年における授業実践
- 2. 8 4学年の授業で用いた教材と利用場面
- 2. 9 4学年の実証授業の考察
- 2. 10 4学年児童の実証授業に対する認識

3 成果と課題

- 3. 1 成果
- 3. 2 課題

引用文献

東御市立北御牧小学校
代表者 校長 牛越 宏江

1. 研究の主旨

音楽づくりの学習では、音の響きや組合せの特徴、音やフレーズのつなげ方や重ね方の特徴を、それらが生み出す良さや面白さなど関わらせて気づく¹⁾能力を育てる。また、内容の取り扱いについては、児童が無理なく音を選択したり組み合わせたりできることや、具体例を示しながら見通しを持って音楽づくりの活動ができるような指導の工夫²⁾が示されている。このねらいの実現のためには、音の出し方や組合せを工夫し、音楽の仕組みに着目して音を音楽へとしていく活動を行うことや、児童が意欲を持って主体的に取り組むようにすること³⁾が重要である。

一方、音楽づくりにおける様々な実践がこれまでも行われてきたが、「教師は音楽づくりの学習に関して、充実していないと多数が回答している状況にあること」⁴⁾や、「児童は音楽づくりの学習に関して、どのようにするのか見通しがもてない」⁵⁾と捉えている。これは、「教師が音楽づくりの学習の進め方、指導方法についてのイメージを明確にもちにくいこと、児童に思いや意図をもたせる手段の不足により、音楽づくりが効果的に行われていないこと」⁶⁾が問題であり、本校でも課題として捉えていた。

この課題を解決するために、これまで音楽づくりの学習を積み重ねてきた中で、児童が視覚によりイメージを共有するための教材を用い、ペアやグループでイメージにつながる音楽をつくったり、つくった音楽を児童が聴き合ったりする学び合いが、自分達がつくりたい音楽につながる糸口となることがわかってきた。本校ではこれを踏まえ、音楽づくりの学習で児童に思いや意図を持たせる映像や絵などのイメージの基を提示し、音の動きやリズムなどの要素を工夫すると音楽ができそうだと見通しを持たせることで、研究テーマである「主体的に音と向き合い、仲間と共につくる喜びを味わうことができる」子どもの育成につながると考えた。本研究では、2年間に渡り行った2, 3, 4学年における音楽づくりの授業実践研究とその有効性について報告する。

2. 研究の内容

2.1 2学年における授業実践

生活の中で聞こえる様々な音の特徴に気づき、その音を声で表現したり、友と協力して音楽をつくったりする5時間の音楽づくりの単元(表1)を計画し、第5

時を実証授業(表2)とした。この単元では、音を声で表現することにより鍵盤ハーモニカ等の楽器演奏による技能差が出ないようにした。また、即興的で様々なリズムや表現力を養えるように常時活動としてまねっこ遊び(例えば猫の鳴き声の題目に対する1人の児童の4拍の表現を次の4拍で全員が模倣する活動)を取り入れた。

実証授業のねらいは、「テーマのイメージを基にそれぞれの音を組み合わせる場面で、友と声を出し合ったり、シートや付箋を使って考えを伝え合ったりすることを通して、音の組合せや強弱、音色などを工夫して音楽をつくることができる」とした。

表1 2学年の音楽づくりの指導計画

時	主な学習活動【音楽を形作る要素】	評価規準
1	●「音見つけ」をして、見つけた音を声で表現する。【音色】	◆生活の中で聞こえる様々な音の特徴に気づいている。
2	●お題を聞いて、声の出し方を工夫しながら表現したり、友達表現をまねたりする。(まねっこ遊び)【音色、反復、よびかけと答え】	◆音の感じを即興的に声で表現する技術を身に付けて友達と伝え合っている。
3	●声の組み合わせ方が色々あること、組み合わせ方によって音楽の感じが変化することを理解する。【縦と横の関係、反復、音色、強弱、重なり】	◆自分たちのグループの音の組み合わせ方について興味関心を持ち、考えを伝え合いながら、音の組み合わせを視覚化していく。
4	●それぞれのグループの音楽はどんな工夫をしているか気づく。【縦と横の関係、反復、音色、強弱、重なり】	◆どのような音楽にするかについて思いを持つことができる。
5 本時	●グループのイメージに合うように声の音色を生かし、組み合わせ方が生み出すよさや面白さを感じ取りながら、声の重ね方、反復の仕方などを考えて音楽をつくる。【縦と横の関係、反復、音色、強弱、重なり】	◆どんな音楽にしたいかについてのイメージを基に、音の組み合わせが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、表現を工夫することができる。

表2 第5時の学習の授業計画

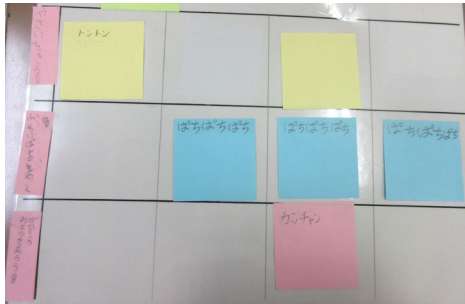
段階	学習活動	備考
導入	常時活動「まねっこ遊び」 学習問題「グループのイメージに合うように音楽をつくらう」 お掃除の音、料理の音(カレー、野菜炒め)、台風の音(強い、人が飛ぶくらい怖い)、お風呂の音	5分 学習教材の確認
展開	学習課題「音の組み合わせ方や声の強弱や音色を工夫してみよう」 ・音を重ねたりずらしたりしてみたいな。 ・音をどう組み合わせると楽しくなるかな。	30分 シートと3色付箋
終末	発表と振り返り 評価規準「どんな音楽にしたいかについてのイメージを基に、音の組み合わせが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、表現を工夫することができる」	10分

2.2 2学年の授業で用いた教材と利用場面

A3の印刷用紙に、縦3分割、横4分割する線を入れてラミネート加工したシート(図1)を作り、それを2枚横につなげた。横に並ぶ8マス(8小節分)を1人の児童が利用し、音を表す言葉を記入した付箋をシートの1マスに1枚貼り付けられるようにした。また、ループメンバーはそれぞれ付箋の色を変え、自分のパートが識別できるようにした。このシートを利用すると、3人グループ全員分のパートが上から順に並ぶと共に、自分が出す音と友が出す音の重なりが見え、8小節

の音楽の流れを視覚化することができる。

図 1 使用した音楽づくりシート



2. 3 2 学年の実証授業の考察

グループ追究場面において、「いろいろな音のお風呂」の音楽をつくるグループは、付箋を貼り付け練習を繰り返しながら、ソロパートを設けることと全員で拍を揃えることにこだわっていた。

表 3 「いろいろな音のお風呂」のグループ追究場面の発話プロトコル (T: 教師 A: 児童〈ピチャピチャピチャ〉 B: 児童〈ザーザーザー〉 C: 児童〈パッシャン〉 数字は発言回数)

A1: ここしっかりはじめをそろえようよ。
 B1: うん。こっちは一人だからそろえるのは関係ない。ここは一人で良いよね。みんな一人のところがあるから。
 A2: うん。必ず一人一回は一人ずつのところを入れよう。それで、最初と最後は特に揃えようよ。
 T1: 練習したのを聞かせてくれる？
 ~教師の手拍子の支援に、グループ全員で音楽を発表する~
 C1: リズムそろわないから、「パッシャン」を「パッシャンパッシャン」にするから。(付箋にパッシャンを書き足す)
 ~もう一度グループで合わせる~
 B2: 今そろったよねえ。
 A3: うん。やったあ、できた。

表 3 より、縦に 3 つの付箋が並び、グループ全員が同時に声をそろえる列(小節)を見ながら、A が「はじめをそろえようよ」(A1) と伝えたところ、納得しながらも必ずソロパートを入れること(B1, A2)をグループで確認した。つくった音楽を聴かせてもらいたいとの教師の言葉に、手拍子に合わせて音楽を発表したところ、C は付箋に記入してあった「パッシャン」では 1 小節には足りないと考え「パッシャン パッシャンにするから」(C1) と付箋に書き足した。グループ全員でそろえるために、パッシャンの 2 回の反復に

リズムを変えたことで、全員の声が拍にそろった。「やったあ、できた。」(A3) の発言で、A がそろえなかった「拍と声」が、C のリズムの変更により実現できたことが示唆された。実証授業の指導者である長野県総合教育センター専門主事からも、人数、小節、拍の条件づけの良さ、言葉のシンプルさが効果的であったとの講評をいただいた。また、付箋とシートを用いて視覚化することにより、耳と目の両方から情報が入り、グループ以外の児童にも音楽の構造が分かることは大切であり、よかったとの言葉もいただいた。声による音楽づくりでは、楽器を使うことによる技能差が出ず、児童は抵抗なく音楽づくりの活動に打ち込んだ。課題としては、音の効果的な組合せ方や強弱において、どういうことが工夫なのかを児童が認識できるように教師が示すことが挙げられた。

2. 4 3 学年における授業実践

リコーダーの吹き方を学び、姿勢や息の強さ、音色が安定してきた児童に、リコーダーの楽しさを更に感じてほしいと願った 4 時間の音楽づくりの単元(表 4)を計画し、第 4 時を実証授業(表 5)とした。

表 4 3 学年の音楽づくりの指導計画

時	主な学習活動【音楽を形作っている要素】	評価規準
1	<ul style="list-style-type: none"> ●ドの音でまねっこ遊び【音色、リズム、旋律】 ●「レ」の音を覚え、ふいてみよう。 ●いろいろなかっこうをふいてみよう。 	◆選指や音色、リズムに気をつけてリコーダーを演奏する技能を身に付けて演奏している。
2	<ul style="list-style-type: none"> ●「レ」の音でまねっこ遊び【音色、リズム、旋律】 ●「かっこうの親子」をテーマに教師が親かっこう、子どもが子かっこうの役割分担で一人ずつ順番に即興的に吹く。 ●できた音楽は、音程、リズムの変化などの音楽的要素でできていることを理解する。 	◆「かっこうの親子」のマンガの吹き出しに鳴き声の音名を書いてペアで演奏することができる。
3	<ul style="list-style-type: none"> ●前時にペアで作った「かっこうの親子」を発表する。 ●違いはどこだろう？ <ul style="list-style-type: none"> ①選んだ音が違うー高い、低い、同じ、違う音 ②音色が違うーやさしい、明るい、もそもそ ③リズムが違うー細かい、のぼしている ④音を重ねる ●かっこうの様子をイメージして書き込ませてから、吹き出しに音を書く。 	◆どのような音楽を作りたか思いや意図を持つことができる。
4 本時	●作り方の手順したがって、自分たちのイメージに合うかっこうの 3 つの 4 コママンガの音楽をペアでつくったり発表したりする。	◆音楽の要素をどう生かすか音を通して、自分たちのイメージに合う音楽をつくらることができる。

表 5 第 5 時の学習の授業計画

段階	学習活動	備考・準備品
導入	常時活動 まねっこ遊び(高い「レ」) 学習問題 「2羽のかっこうの 4 コママンガをペアで協力して音楽にしてみよう」	10分 ・選指カード ・かっこうマンガ配布用、掲示用
展開	学習課題 「かっこうがどんな様子で鳴いているのか考えてから音楽をつくらう」 ・音を選ぶ ・どんな音色で ・どんなリズムで ・どんなふうに重ねて 「かっこうの親子」「のんびりかっこうとせつちかっこう」「なかよしかっこう」のイメージを基に音楽をつくる。	25分 かっこう 4 コママンガ学習カード
終末	発表と振り返り 評価規準 「イメージに合う音を選び、音楽の要素をどう生かすか音を出し合ったり聴き合ったりして自分たちのイメージに合う音楽をつくらることができる。	10分

この単元では2年の実証授業における、「ということが音楽づくりの工夫なのかを具体的に示すこと」との課題に対し、音楽のテーマとストーリーを設定し、それを表現するためにどこをどうすると音楽ができそうかと児童に見通しを持たせることで主体的に音と向き合い音楽をつくることができるであろうと考えた。

単元の中で生かしたい音楽的要素は、音程、音色、リズム、音の重なりとし、実証授業のねらいは、「3種類のかっこうのイラストから感じたイメージを音楽の要素や仕組みに結びつけて、それをどう活かすか互いに音を出し合い聴き合いながら工夫し、自分達のイメージに合う音楽をつくることができる」とした。

2.5 3学年の授業で用いた教材と利用場面

リコーダーを学習した児童が、技能差を最小限にしながら音を出せるよう、かっこうの4コマのイラストを提示し、音楽をつくるためのモデルとした。また、児童がイメージを膨らませやすくする手だてとして、各コマに吹き出しを挿入し、表現したい鳴き声を言葉で記入できるようにした(図2)。

図2 かっこうの3つの4コマのイラスト



2.6 3学年の実証授業の考察

表6より、子かっこうが母かっこうの鳴き声をまねる場面で、「違う音で」、「やさしい音で」と提案した発言(E1)があり、教師は、違う音が音程に、やさしい音が音色に結びつくよう価値づけた(T1)。これを受けたD2やE2の発言から、4コマのイラストのイメージを、音程という音楽的要素に結びつけたことが伺えた。また、再度子かっこうが鳴く場面では、「もっと簡単なやつ。まだ子どもだから。」とリズムに着

目した発言により、かっこうの音楽を完成させていった。音楽のモデルとストーリーを4コマのイラストとして設定したことは、児童の考えが音楽的要素に向き、音楽をつくる上で児童に見通しを持たせることができたことが示唆された。実証授業の課題としては、表6に示したグループを代表とする、児童の言葉と音楽的要素の価値付けまで至らなかったグループがあったことが挙げられた。また、着目させたい音楽的要素が多すぎたため、グループ内でも視点が広がりすぎて考えがまとまらないため、更に音楽的要素を限定することが挙げられた。

表6 「かっこうの親子」のグループ追究場面の発話プロトコル (T:教師 D, E, F:児童 数字は発言回数)

D1: (母さんかっこうが泣き方を教える場面) お母さんかっこうは子どもの見本だからレッスンにしよう。
E1: (子かっこうがまねをする場面) 子どもは違う音でラッソーにする?やさしい音で。
T1: 「違う音」って音程のことだよ。「やさしい音」って音色のことを表しているんだね。
D2: お母さんかっこうとあまり変わらなくなる?
E2: じゃあレッスンにする。
F1: (もう一度子かっこうが鳴いてみる場面) お母さんと同じ声で鳴きたいと思っていると思う。
E3: でもさっきとは変える。
D3: じゃあ、ラッソーは?
F2: もっと簡単なやつ。まだ子どもだから。
D4: ラッソーにしよう。

2.7 4学年における授業実践

これまでの授業実践で、児童が主体的に音楽づくりに取り組む手だてとして、児童全員がイメージを共有できる具体的なモデルの必要性が示唆された。また、音程やリズム等については、教師と子どもが役割分担をし、即興的にリコーダーを吹いてみる(表4の第二時)活動や、完成させた音楽の発表時に教師が具体的に音楽的要素を価値づけることで、児童が価値付いた音楽的要素を使いこなす姿が見られた。これらを踏まえ、4学年の日本の民謡に親しむ単元において、南国独特の雰囲気やコミカルで味わいのある沖縄音階を扱う5時間の音楽づくりの単元(表7)を計画し、第5時を実証授業(表8)とした。単元を進めるにあたり、沖縄やその他の日本の民謡を十分聴かせた上で印象の違いを話し合い、音楽をつくるための映像や絵等のモデルを示すことで、音楽づくりへ向けた思いや意図を児童

に持たせた。また、音の動きとリズムの 2 つの音楽的要素を工夫すると音楽ができそうだと見通しを持たせることが「主体的に音と向き合い、仲間と共に音楽をつくる喜びを感じる」ことにつながると考えた。

実証授業のねらいは、「ペアで考えたセリフを入れた 4 コマのチンアナゴのイラストを基に、協力しながら沖縄音階から音を選び、音の動きとリズムを工夫してチンアナゴの動きや様子を表す 8 小節の音楽をつくることができる」とした。

表 7 4 学年の音楽づくりの指導計画

時	主な学習活動【音楽を形作る要素】	評価規準
1	<ul style="list-style-type: none"> ●沖縄音階を口ずさんだり、鉄琴で弾いてみたりする。 ●2 小節の音楽を聴いて、すぐに真似をして弾く練習をする(まねっこタイム)【音階、音色、拍子】 ●沖縄音階を使って音楽づくりをすることを覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆鉄琴を使い、沖縄音階を使った音のつなげかたを試したり、聴き取った音を演奏したりする学習に興味を持って進んで取り組むことができる。
2	<ul style="list-style-type: none"> ●まねっこタイム【音階、音色、拍子、テンポ】 ●チンアナゴの動きをどう音の動きで表すか考えながら鉄琴で弾いたり、歌ったりする。考えた音を音楽シートに書く【音の動き、音色、拍子、テンポ、2 小節】 ●ペアで考えた音の動きを発表する 	<ul style="list-style-type: none"> ◆チンアナゴの動きを表現するために、音の動き方を工夫することができる。
3	<ul style="list-style-type: none"> ●まねっこタイム【音の動き、リズム、音色、拍子、テンポ】 ●「朝のチンアナゴ」の絵を見て弾いたり歌ったりしながらリズムを考える。【リズム、音色、拍、2 小節】 ●つくったリズムを発表し合い、みんなでやってみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆チンアナゴの動きの様子を表現するためにリズムを工夫することができる。
4	<ul style="list-style-type: none"> ●ペアで 4 小節の音楽をつくる。 ●発表会を行う。 ●次時の 4 コマの絵を見て、チンアナゴのセリフをペアで考えながら書きこみ、音楽づくりへのイメージ共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆チンアナゴの動きに合った音楽をつくるためには、音の動きとリズムを工夫すればつくれることがわかる。

また、音楽のイメージを共有するために、チンアナゴのイラストを用いた学習カード(図 5)を使用した。

図 3 授業で使用した鉄琴

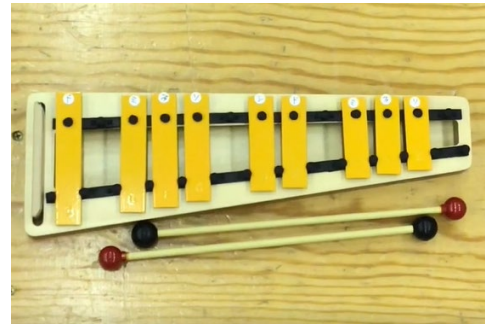


図 4 黒板に掲示した音楽づくりのヒント(左)

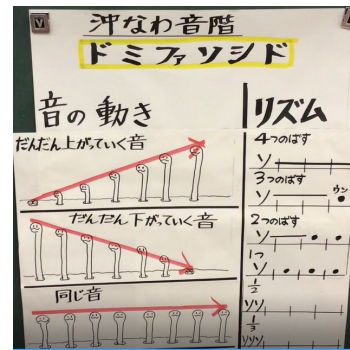


図 5 チンアナゴの学習カード(右)

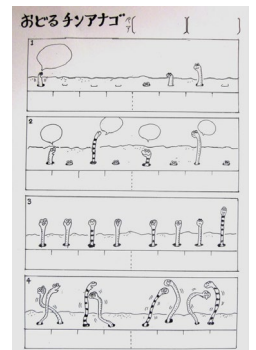


表 8 第 5 時の学習の授業計画

段階	学習活動	備考
導入	常時活動「まねっこタイム」 学習問題「ペアで協力しながら「踊るチンアナゴ」の音楽を沖縄音階を使ってつくりたい。」	5分 鉄琴 拡大作曲シート
展開	学習課題「ペアで書いたチンアナゴの動きや様子を表すセリフを基に、音を選び、その音の動きとリズムを工夫して 8 小節の音楽をつくりたい。」 ・4 コマのチンアナゴのイラストから音楽をつくり練習しよう。 ・ペア同士で発表・鑑賞し、感想を伝え合おう。	30分 音の動きとリズムのパターンを掲示
終末	発表と振り返り ・音の動きにどんな工夫があるかな ・リズムにはどんな工夫があるかな 評価規準「沖縄音階を使い、音の動きとリズムを工夫して、チンアナゴの動きや様子を表すセリフを基にした音楽を協力してつくることできる」	10分 ふり返り用紙

2. 8 4 学年の授業で用いた教材と利用場面

楽器演奏の技能差による音楽づくりへの負担を防ぐため、鉄琴を使用した。鉄琴は叩くと音を発するため扱いが容易であり、木琴より音が伸びるため旋律のつながりが分かりやすい。さらに音を選択する手だてとして、沖縄音階で多用されるド、ミ、ファ、ソ、シの音板のみ残した鉄琴(図 3)を使用した。また、黒板には沖縄音階を用いた音の動きやリズムを例示したヒント(図 4)を見童がいつでも確認できるよう掲示した。

2. 9 4 学年の実証授業の考察

表 9 「おどるチンアナゴ」のペア追究場面の発話

プロトコル (T: 教師 G, H: 児童 数字は発言回数)

G と H は音楽づくりの活動が始まると同時に、黒板に掲示されたヒントの紙の前に行き音の動きとリズムの 2 つの音楽的要素について確認する。

～4 コマ目の場面～

G1: 音を 2 つに分けたらどうかな。
 H1: 分けるって?
 G2: 上と下で。
 H2: あっ、そういうこと。
 G3: 2 匹ずつペアでおどっているでしょう。ぼくはソソドー、ソソドーって繰り返すね。
 H3: ペアが 4 つあるから 4 回?
 G4: うん。そう。
 H4: じゃあ、私は高い方。(いろいろ試しながら) ミミソー、ミミソーはどう。
 G5: いいじゃん。じゃあ同時にやってみよう。せーの。
 ～2 人で合わせる～
 G6: なんかハモっていて良い感じ。いいじゃん。
 H5: うん。楽しくおどっている感じがする。ミミソーのソをのぼすのもいい。

表 9 より、チンアナゴがペアで楽しそうにおどって

いる事に気づいたGは、「音を分けたら」(G1)と提案した。HはGに質問(H1)することで、Gが考えた「分ける」とは、高音と低音パートの2つに分けて同時に演奏することだと理解し、高音パートを担当した。また、Hの「ソをのばすのもいい」(H5)とのつぶやきから、リズムについても考えを深めていることが示唆された。

振り返りの記述では、G,H共に「音を選ぶことができた」「音の動きを工夫できた」「リズムを工夫できた」「ペアで協力できた」の4つの自己評価項目全てに◎を記していた。また、自由記述欄には、Gは「リズムを変えて音の組合せを変えたことが楽しかった」、Hは「2人でそろえたことが楽しかった」と記述した。この振り返りは、授業のねらいにつながる自己評価であると考えられる。授業後の講評として、本授業では児童の目が音楽をつくることに向いていたこと、学習カードの工夫や音板の限定が子ども達の主体的な学びにつながったことを、指導者である長野県教育委員会学びの改革支援課指導主事からお話いただいた。

2. 10 4 学年児童の実証授業に対する認識

4 学年児童の実証授業における認識を調査するために、授業終了後、4年松組児童33名(男子18名 女子15名)を対象に質問紙調査を行った。目的は、音楽づくりの授業に仲間と共に主体的に取り組み、仲間と共に音楽をつくる喜びを感じることができたかの有効性に迫ることである。表10の質問を行い、4段階尺度で回答させ、その理由を自由記述させた。研究テーマである「音楽をつくる喜び」については、児童が考えやすい言葉として「楽しかったか」と問い、その理由の自由記述から喜びを感じたかを判断することとした。

表10 質問紙調査による質問事項

	質問事項
質問①	授業で音楽づくりに進んで取り組むことができましたか。
質問②	①の理由は何ですか。
質問③	沖縄音階を使った今回の音楽づくりの授業は楽しかったですか。
質問④	③の理由は何ですか

表11は、質問①の結果を示したものである。「できた」、 「すこしできた」と答えた児童と、「あまりで

きなかった」、「できなかった」と答えた児童について1×2の直接確立検定(両側検定)を行った。本授業により「できた」、 「すこしできた」と答えた児童は、「あまりできなかった」、「できなかった」と答えた児童に対して有意に多かった。

表11 授業で音楽づくりに進んで取り組むことができたか

できた	少しできた	あまりできなかった	できなかった
24	8	1	0

※数値は人数(n=33)。p=0.000, P<.01。

表12は、質問紙調査の質問②の自由記述をカテゴリ分けしたものである。最も多かったのは「イラストから音の動きやリズムを工夫した」であった。「ペアで協力したので音楽ができあがった」との回答の中には、「意見を出し合ううちによりアイデアが浮かんだ」という、ペアで考え合ったことの有効性に触れる意見もあった。また、鉄琴の使用についての意見の中には、「リコーダーや鍵盤ハーモニカでは合わせられなかったと思う」との記述もあり、鉄琴を使うことによる技能面の容易さに言及している児童もいた。あまりできなかったと回答した1名の児童は、「ペアでお互いに意見を出しあっていたけど、音楽が決まらないところがあった」と記述していた。

表12 質問1の理由

	理由の自由記述	人数
1	イラストから音の動きやリズムを工夫した	21
2	ペアで協力したので音楽ができあがった	17
3	鉄琴を使ったので合わせやすかった	11
4	黒板に貼られたヒントが役だった	5
5	数ペアでつくった音楽を聴き合った	4

※複数回答、数値は人数。

表13は、質問③の結果を示したものである。「楽しかった」、「少し楽しかった」と答えた児童と、「あまり楽しくなかった」、「楽しくなかった」と答えた児童について1×2の直接確立検定(両側検定)を行った。本授業により「楽しかった」、「少し楽しかった」と答えた児童は、「あまり楽しくなかった」、「楽しくなかった」と答えた児童に対して有意に多かった。

表 13 沖縄音楽を扱った音楽づくりの授業は楽しかったか

楽しかった	少し楽しかった	あまり楽しなかった	楽しくなかった
21	9	3	0

※数値は人数 (n=33)。p=0.000, P<.01。

表 14 は、質問紙調査の質問④の自由記述をカテゴリ分けしたものである。最も多かったのは「自分達の考えを音楽にできた」であり、自分のイメージを音楽につくり上げていく過程に対して、児童は楽しかったと考えていることが分かった。また、「沖縄音階がとてもきれいだった」という理由の中に「鉄琴の高い音が響いてきれいだった」という意見が複数あり、独特の雰囲気である沖縄音階を、鉄琴の澄んだ響きで表現できたことも授業の楽しさにつながったと考えられる。理由の 1, 3, 4 は、創造や思考に結びつく記述であるため、喜びにつながる楽しさであると判断した。「あまり楽しくなかった」と答えた児童のうち、1名は「沖縄音楽のいろいろなことが分かった」と記述したので、沖縄音楽への理解は深まったと考えた。他の 2 名は、「ペア相手にもっと協力してほしかった」と記述していた。

表 14 質問 3 の理由

	理由の自由記述	人数
1	自分達の考えを音楽にできた	25
2	沖縄音階がとてもきれいだった	23
3	ペア相手の意見を知れたことが楽しかった	13
4	イラストから音楽を想像することができた	6

※複数回答、数値は人数。

以上のことから、沖縄音階を用い、鉄琴を使用したペア学習を取り入れた本学習において、児童はチンアナゴのイラストからイメージを膨らませ、友と協力し、考えを深め合いながら 1 つの音楽をつくり上げることに楽しさを感じていたことが示唆された。

3. 成果と課題

3. 1 成果

本研究は、主体的に音と向き合い、仲間と共につくる喜びを味わうことができる音楽づくりの授業をめざした授業実践研究である。令和 2 年度より 2 年に渡る研究を行い、4 学年における実践授業は上田小県教育課

程研究協議会（新型コロナ感染予防対策としてオンラインによる実施）で公開した。

2 学年では、身近な音と向き合い、音を表す言葉を記入する付箋や付箋を貼るシートを利用したグループ学習を取り入れた音楽づくりを行った。3 学年では、イメージを共有するためにかっこうの生活をモデル化し、ストーリーを表現する音楽的要素を考え合うペア学習を取り入れた音楽づくりを行った。4 学年では、音楽的要素のヒント、チンアナゴをモデル化した学習カード、沖縄音階のみの鉄琴を用い、音の動きとリズムを工夫するペア学習を取り入れた沖縄音階での音楽づくりを行った。実証授業終了後、児童はモデル化したイラスト、ペアでの協力、鉄琴や黒板に掲示されたヒントを理由に主体的に取り組むことができたと考えていた。また児童は、考えを音楽にできたこと、ペア相手の意見を聞いたこと、イラストから音楽を想像できたことから、授業が楽しかったと考えるに至ったことが明らかとなった。

以上のことから、イメージを 4 コマのイラストでモデル化し、発達段階に応じて声や技能差が少ない楽器を用い、作りたい音楽を表現するための音楽的要素を考え合ったり、できあがった音楽を複数のペアで発表し合ったりするペアやグループ活動を取り入れた音楽づくりの学習は、児童が主体的に音と向き合い、仲間と共に音楽をつくる喜びを味わうために有効であることが示唆された。

3. 2 課題

音を音楽に作り上げていく上で、児童の音楽表現への理解は欠かせない。それには、平素の授業で音楽表現の良さや面白さ、美しさを感じ取ることが必要である。本校では、音楽表現を学びながら、音楽づくりに必要な即興的に発想を表現する能力を伸ばすために、常時活動としてまねっこ遊び(4 学年以上はまねっこタイムと呼ぶ)を取り入れてきた。この活動により即興的な表現力が向上していることを児童も教師も実感しているため、友の表現をまねることが一人ひとりの児童の音楽表現の広がりにつながる機会になると考えている。しかし、まねっこ遊びのどの要素が、音楽づくりにおける児童のどの表現に表れたり、つながったりしているかについては明確になっていない。今後、常時活動が児童の音楽的な学びの深まりとどのように関わっているかについて明らかにしたい。

引用文献

- 1) 文部科学省：「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）」 pp.114-121, 2017
- 2) 文部科学省：「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）」 pp.122-125, 2017
- 3) 長野県教育委員会：「長野県小学校教育課程学習指導手引書 音楽編」 pp.47-53, 2010
- 4) 古賀 陽子・裏西 仁・橋口 加奈子・前田 若菜：「思いや意図をもって表現する児童を育てる音楽づくりの学習指導」 福岡市教育センター音楽科研究室研究紀要, 952, 1-31, 2014
- 5) , 6) 四日市市教育委員会教育支援課：「小学校音楽科の表現領域「音楽づくり」が活性化する指導に関する研究」研究調査報告, 404, pp.1-4, 2018